

埋蔵文化財と文化財建造物の情報誌

文化財センター季刊情報誌

【かざぐるま】

2011春号

54

財団法人 和歌山県文化財センター

# 風車

紀州の歴史と文化の風

特集

すさみ町 立野遺跡の発掘調査

連載

文化財建造物課短信

考古学の散歩道

「海人の世界」

きのくに歴史小話

「建築彫刻の話」

「発掘屋余話」

## すさみ町立野遺跡の発掘調査

平成22年8月から平成23年3月まで近畿自動車道紀勢線事業に伴うすさみ町立野遺跡の発掘調査を実施しました。調査面積は約8500㎡で、水田状遺構、杭列、自然流路などが見つかっています。住居跡などは見つかりませんが、遺物では弥生時代前期から中世にかけての土器類が出土し、隣接地で長期にわたって集落が営まれたことが窺えます。

調査地の西端で検出した弥生時代前期の自然流路は、山裾に沿って南流するもので、幅約15m、深さ1.2〜1.5mで、長さ約40mを確認しています。流路からは伐採された木材などとともに県下最古段階の弥生土器や石器・木製品が多量に出土しました。

木材は加工しやすいように水漬けした状態で貯木されていたと想定でき、大きいものでは直径40cm以上で長さが10mを超えます。また、木製品の容器や鍬などには未成品が多く、石斧

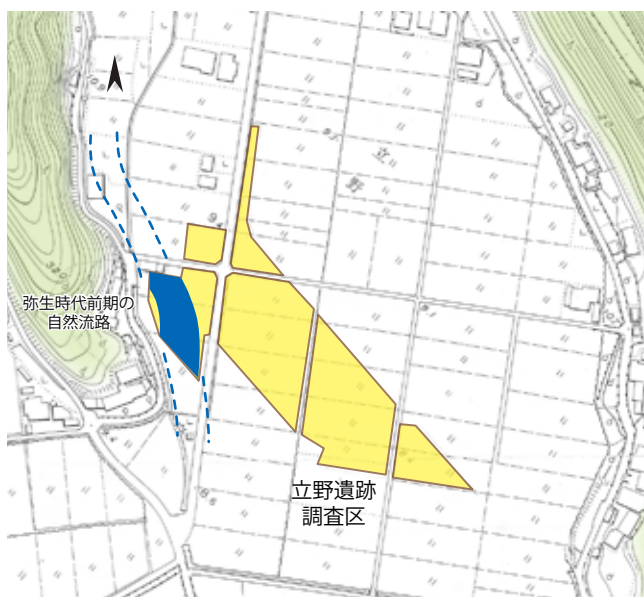
は木材加工用の小型に限られることから、流路の近くで一連の木製品製作を大規模におこなっていた可能性が高いと言えます。

弥生土器と共に突帯文土器や石棒・打製石斧（石鍬）など縄文時代の影響が色濃く残る遺物が出土しています。また、多くの木製容器や鍬の形態は弥生的でなく、定形化される以前のもので考えられ、縄文時代から弥生時代への過渡期の様相を呈しています。

他地域の土器が出土し、近くに天然の良港をひかえることから、弥生時代前期という限られた時期に、かなり大規模に木器生産をおこない、周辺地域や海路を利用して遠隔地まで供給していた集落と考えることができます。

立野遺跡は、県下でいち早く稲作を受け入れた農耕集落が近接地に存在したことが窺え、汎列島の弥生文化の伝播・展開を考えるうえで貴重な遺跡といえます。

（川崎 雅史）



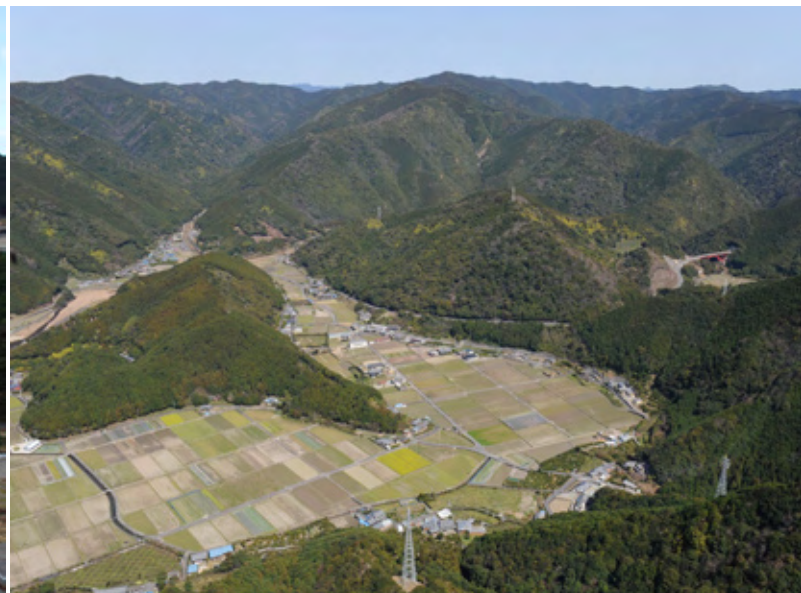
調査区位置図 S=1:4,000



周辺の遺跡 S=1:50,000



調査区近景（北東から）



遺跡遠景（南西上空から）



立野遺跡 弥生時代前期の木製品・木材が出土した自然流路 発掘風景（北から）



立野遺跡 弥生時代前期の遺物出土状況 1 弓 2 容器と匙 3 広鋤 4 泥よけ(農具) 5 石棒 6 琴

熊野本宮大社の第三殿と第四殿

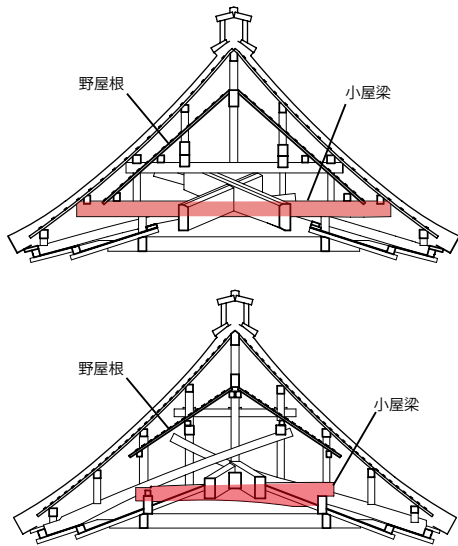
昨年修理事業が始まった熊野本宮大社では、重要文化財指定の三棟の社殿の、ひわだ 桧皮屋根葺き替えを順次進めています。まず第三殿に着手し、第三殿の屋根葺きが完了後、第四殿にとりかかりました。当センターでは工事に伴い、文化財の調査も併せて行っています。本稿では、調査で明らかになった、第三殿と第四殿の「違い」について報告します。



第三殿の外観



第四殿は第三殿と全く同じ外観



上：第三殿小屋組 下：第四殿小屋組

りの虹梁こうりょうなどに見られる渦紋かもんや若葉などの絵様彫刻までも、両棟は区別が付かないほど良く似ていました。建った年代は異なりますが、明らかに同じものを造ろうとしたのです。このように同じ建物を複数並べる社殿形式は、それほど珍しいわけではありません。しかし一見同じはずの社殿が、見えないところは相当に異なっていたのです。

それは小屋組の構造でした。第三殿、第四殿ともに桧皮屋根の下には、板葺きの野屋根が造られている点は共通していますが、小屋梁の掛かたが全く異なっ

ていました。第三殿では丸桁がぎょうという軒桁の筋より小屋梁を桔はね出して、三の母屋もやを支えています。これに対し第四殿では丸桁筋で小屋梁が止まり、一、二の母屋を束立つかてして支えるシンプルな構造でした。第三殿は三の母屋を小屋梁で支えるため、丸桁から外側の屋根荷重は小屋梁も負担する構造ですが、第四殿は丸桁から外側の屋根荷重は全て桔木はねぎが支える構造です。桔木には相当の荷重がかかりますが、軽い桧皮屋根なので問題なかったのでしょうか。

構造を見比べると、第三殿の方が構造合理的で、第四殿の方は施工合理的といえるでしょうか。野屋根の勾配も違って、第四殿のほうが緩く、屋根の掛かる範囲も狭いものでした。

第四殿は見えるところは徹底的にこだわって第三殿と同じに造りましたが、見えないところは大きく変えたようです。なぜこうなったのか理由は不明ですが、当時の造営状況に思いを巡らせた新たな発見でした。

(御船 達雄)

## 海人の世界 — 漁撈具 —

富加見 泰彦

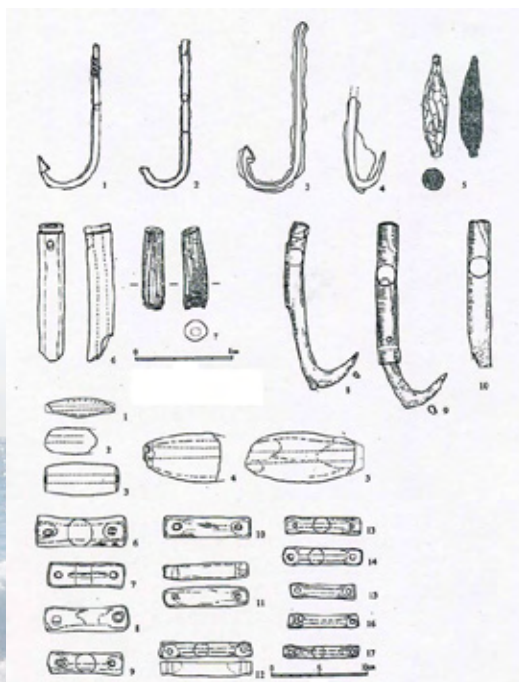
海辺の遺跡を発掘調査すると漁撈<sup>ぎよらう</sup>に関する生産用具が出土します。今回は魚を捕獲する漁撈具について話をします。漁撈具には釣り針<sup>ぎじえ</sup>、疑似餌<sup>どすい</sup>、網に装着する土鍾<sup>しとつ</sup>、刺突具（モリ、ヤスの類）等があります。和歌山市の西庄遺跡<sup>にしの上</sup>を例にとると、釣り針は鉄製と鹿角製<sup>ろっかく</sup>があり、これらを組み合わせた複合式釣り針が主流です。複合式釣り針や疑似餌による漁獲対象はカツオ、シイラ、ウシサワラ等でいわゆる「アオモノ」と呼ばれる比較的水面近くを回遊したり遊泳する魚やマダイ、ハモ、オコゼといった馴染みの深い魚も漁獲されています。西庄遺跡では根魚<sup>ねぎかな</sup>も含め 50 種類以上確認しています。

西庄遺跡で出土した魚骨で最も多かったのがカツオです。カツオは日本の水産業のなかでも重要な位置を占める魚種の一つで、太平洋沿岸に生息するカツオは夏には黒潮<sup>くろしお</sup>と親潮<sup>おやしお</sup>がぶつかる三陸沖あたりまで北上し、秋に親潮の勢力が強くなると南下します。紀伊半島のカツオの主漁場は紀南地方で3月下旬～6月と9月～11月が漁期です。初夏のカツオは「初ガツオ」、秋に獲れるカツオは「モドリガツオ」、脂がのっているので「モチガツオ」とも呼ばれています。紀淡海峡を臨む加太遺跡<sup>かだ</sup>や海岸線の遺跡からも、カツオの骨が出土することが多く、当時は紀淡海峡までカツオが漁獲できたのでしょう。古墳時代の海人にとって重要な食料源であったことは容易に推察できます。

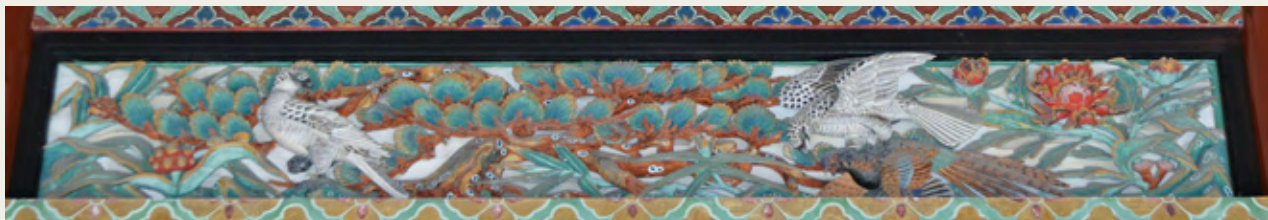
鹿角製複合釣り針は、田辺市磯間岩陰遺跡<sup>いそまいわかげ</sup>や神奈川県三浦半島の海外洞穴<sup>もろいそ</sup>、諸磯遺跡で酷似する釣り針が見つかっています。この釣り針はカツオ釣り専用<sup>もろいそ</sup>に開発されたものと言われています。共伴する土器からみると紀伊半島出土が古く、三浦半島出土のものはそれに比べ新しくなります。今のところ紀伊半島にその初現があると考えられます。

ウシサワラは南シナ海など亜熱帯地域に分布する巨大魚で体長 2 m を超える巨大魚です。最近日本近海ではほとんど見かけませんが、かつて弥生時代には大阪湾でも捕獲されていた魚です。西庄遺跡では、竪穴住居跡から椎骨<sup>ついこつ</sup>が出土し、推測すると体長は 2 m を超える大物です。この竪穴からは鹿角製の疑似餌と鉄製の刺突具が出土しています。想像をたくましくすると、ひょっとしてこの疑似餌で巨大魚を釣ったあと、刺突具で仕留めたかも知れないと考えただけで楽しくなってきます。

網漁具<sup>あみりょう</sup>としては両端に穴を穿った瀬戸内型土鍾と呼ばれるものが多く出土しています。重量は 20 g ～ 30 g のものが大半で 100g を超えるものは少なく、重量のある管状の土鍾はほとんどありません。このことから西庄の網漁は、少人数による刺し網漁が主流で、大人数が必要な地引網漁<sup>じびき</sup>は行われなかったと考えられます。記録に残らない日々の出来事が遺物から分かってくるのが考古学の重要な使命の一つです。



西庄遺跡出土 海の生産用具（釣り針・土鍾）  
（中段右3点は磯間岩陰遺跡出土）



紀州東照宮の欄間彫刻

## 建築彫刻の話 ⑫

和歌山市和歌浦にある紀州東照宮の「鷹と雉」の欄間彫刻を紹介します。「鷹」としましたが、羽の色を見ると実際は「隼」のようです。

東照宮は元和七（1621）年に紀州徳川家初代の頼宣によって創建されました。祭神は東照大権現、つまり頼宣の父、徳川家康です。

社殿は正面から奥に拝殿、石の間、本殿の三棟の建物が連なった、権現造りという形式です。

「鷹と雉」の彫刻は、社殿に向かって最初の建物、拝殿の正面、しかもその中央間に飾られています。参拝者にとって最も目に着く場所です。鷹は二羽います。右の一羽は翼を広げ、鋭い爪でまさに雉を捉えた瞬間、左の一羽は振り返ってその一瞬を悠然と眺めています。

社殿を荘厳する彫刻の主題としては、他に例のない特異なものです。これは鷹狩りの光景だと思われまます。織田信長をはじめ、戦国武将は鷹狩りを嗜みました。中でも家康は鷹狩り好きで知られています。家康は鷹狩りに行った後で体調を崩し、三ヶ月後に亡くなりました。その時、頼宣は一五歳でした。

少年頼宣にとって、この鷹狩り彫刻は、父家康の想い出そのものであったに違いありません。

（鳴海 祥博）

## 発掘屋余話 ⑫

根来寺・院数文解

スペインが生んだ世界的建築家アントニ・ガウディの作品として知られるバルセロナのサグラダ・ファミリアは、1882年に工事に着手し、今なお造られつづけています。まことに気の長いというか継続する意志の強さに圧倒されますね。

一般的に宗教施設というのは、数世代という長い年月にわたってつくられることが多いですね。身近なところでは根来寺の大塔（国宝）がそうです。この大塔の造立に取りかかったのが文明九（1477）年、完成したのは天文十六（1547）年以降とみられますから実に七十年以上の歳月を費やしています。

それにしても見事なまでにこの七十年がそのまま根来寺の勢力伸張時期に重なっています。これまでの発掘調査の成果から出土する遺物の量はこの時期に著しく増大していますし、寺院跡の遺構などもこの時期には、山内の奥深くまで伸展していたことが確認されています。最盛期の根来寺は私たちの想像以上のものであったと考えていいでしょう。

事実、その頃日本に来ていたポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは「山内には僧だけでも八千から一万人が住んでいた」こと、「彼らの建物は日本の寺院のなかでとりわけ豪華でりっぱだった」と根来寺について書き遺しています。

いったい最盛期にはどのくらいの数の寺院があったのでしょうか。ある研究者は、発掘調査の成果や現在残っている地形などから推して四五〇という数字を挙げています。長く根来寺の発掘調査に携わってきた筆者としては、少なくともその倍近く、八百はあったと思いたいですね。もちろんちゃんとした根拠はありますよ。——嘘八百。

（村田 弘）

# 催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報

県立紀伊風土記の丘 <http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp>

○春期企画展「弥生時代から古墳時代へ ～暮らしの変化を探る～」

期 間：平成 23 年 4 月 12 日（火）～6 月 26 日（日）

内 容：時代が弥生時代から古墳時代へ変化していく中で、暮らしがどのように変化していったかを遺物の展示をとおして辿ってみます。

和歌山県立博物館 <http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp>

○企画展「華麗なる紀州の装いーかみ・ひと・ほとけをつなぐー」

期 間：平成 23 年 4 月 23 日（土）～6 月 5 日（日）

内 容：紀州には、神社や寺院に奉納されたり、芸能の中で人々によって守られてきた装束などの古い時代の染織資料が、数多く残されています。この展覧会では、国宝や重要文化財に指定されている染織資料を中心に、紀州の歴史や文化とともにご紹介します。

○企画展「和歌山城と城下町に住む人々」

期 間：平成 23 年 7 月 23 日（土）～9 月 4 日（日）

内 容：子どもたちを主な対象とした夏休みの企画展。隣接する和歌山城の歴史を物語る資料や、城下町の絵図や商人の姿を描いた絵巻などから、和歌山城下に住んだ人々の生活を紹介します。

和歌山市立博物館 <http://www.wakayama-city-museum.com>

○特別陳列「心の旅・全国の郷土玩具展」

期 間：平成 23 年 4 月 23 日（土）～6 月 12 日（日）

内 容：市内の郷土玩具収集家より寄贈された、明治時代後半から戦後の高度経済成長期までの全国の郷土玩具を展示します。

高野山霊宝館 <http://www.reihokan.or.jp>

○開館90周年記念企画展「宝を護れ！～大正時代の保存プロジェクト～」

期 間：平成 23 年 4 月 29 日（金・祝日）～7 月 10 日（日）

内 容：大正 10 年（1921）に創立された高野山霊宝館は、平成 23 年（2011）をもって開館 90 周年の節目を迎えます。これだけ長い歴史をもつ展示施設は数少なく、日本最古の木造博物館建築である本館は、平成 10 年（1998）に登録有形文化財になりました。こうした霊宝館の歴史と沿革、建築について紹介します。

8	7	6	5	2	1	目次
催し物案内	きのくに歴史小話 「建築彫刻の話」 「発掘屋余話」	「海人の世界」	連載コラム 考古学の散歩道	文化財建造物課 短信	「すさみ町 立野遺跡の発掘調査」	表紙 立野遺跡 木製品・木材出土状況 特集

## （財）和歌山県文化財センター現場事務所等一覧

【埋蔵文化財課分室】

◎和歌山市新在家 61 番地-4

TEL 073-472-3710

◎和歌山市土佐町 2 丁目 58-3

TEL 073-427-6174

【文化財建造物修理事務所】

◎金剛三昧院保存修理事務所

伊都郡高野町高野山 425

TEL 0736-56-5578

## 風車 54 (2011 春号)

平成 23 年 3 月 31 日発行

（財）和歌山県文化財センター

〒640-8404

和歌山市湊 571-1

TEL 073-433-3843

FAX 073-425-4595

Email maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>